

校長式辞

宇津峰から昇る朝日に新たなる季節の始まりを感じさせる今日の佳き日に、保護者の皆様をお迎えしまして、福島県立須賀川高等学校第七十四回卒業証書授与式を挙げてまいること、誠に嬉しく思います。コロナ禍ゆえに出席者に制限がある中ではありますが、本日も出席いただきました皆様方には、心から御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与しました百八十六名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。また、高校生活三年間を支えていただきました保護者の皆様、本日は誠にありがとうございます。衷心よりお喜び申し上げます。

卒業生の皆さん、皆さんは、本校創立百十四年目、須賀川高校の名では最後の卒業生となります。本年四月より、須賀川創英館高校となりますが、その礎には、皆さんの築いた須賀川高校の伝統があり、皆さんの母校であることに変わりはありません。卒業生として、須賀川創英館高校の「これから」を温かく見守ってほしいと思います。

皆さんは、三年前、私が本校に赴任した年に入学しました。皆さんの入学を許可した私が、卒業も認めるという、校長としては、非常に感慨深いものがあります。皆さんの三年間の成長に関わり、そして見届けることができたことを大変嬉しく思うとともに須高の校長として誇りに思います。

三年間の須高での生活ですが、福島県としては、未だに東日本大震災の影響が残る中、入学後の秋には、台風十九号により三年に一度の文化祭が規模縮小になるという事態、昨年二月の震度六の地震、そしてコロナ禍と何かと出端をくじかれることが多かったと思います。二年もの間、まさかマスクを常時つけて生活するとは夢にも思わなかったでしょう。このような状況下でしたが、よくぞ高い志を持ち続け、学校生活を全うしたと思います。改めまして、「おめでとう。よく頑張った。」と、言いたいと思います。

さて、そのような皆さんに二つの言葉を贈りたいと思います。

一つ目「逆境にめげず前へ」

二つ目「オプションを多く持つ」

です。いずれも、2年次の学年集会で私が皆さんに話した事です。集会は、修学旅行が中止となった後の重い雰囲気の中での開催でした。学年の先生方の、生徒達を何とか元気づけたという強い思いがありました。皆さんを叱咤激励すべく話したことを、私は覚えています。

一つ目の「逆境にめげず前へ」について、集会終了後の生徒感想には、

「私たちは試されているんだなと感じます。厳しい状況であってもめげずに負けずに勉強に部活動に力を入れていきたいです。」

というものがありました。また、

「逆境に打ち勝つだけでなく前に進むことが大事なんだ！」

というものもありました。いかがでしょうか。厳しい状況においても、それを糧にし、前に進めるかどうか。そこに気づいた皆さんの仲間がいました。精神的な成長を大いに感じまし

た。嬉しかったです。卒業生の皆さんが、どの世代の人たちよりも精神的にたくましい大人になることを確信しています。

二つ目の「オプションを多く持つ」について、「何かを決めるに当たっては、出来るだけオプション（選択肢）を多く持つこと」からの言葉です。思い込みだけで判断するのではなく、冷静に、多面的に捉え考えることで、より良い方向へ物事を進められるということです。江崎玲於奈博士が読売新聞社のノーベル賞フォーラムで述べたことです。

「逆境にめげず前へ」そして、「オプションを多く持つ」皆さんに贈ります。贈った言葉を具現化するためには、皆さんはこの先も、生涯に渡り、「学び」続ける必要があります。

「生涯に渡り、学び、伸びゆく須高生」

須賀川高校の、何と言っても一番の伝統です。新たなる高校においても、しっかりと継承していきたいと思います。

さて、本日ご出席いただきました皆様、改めまして本日はありがとうございます。時代や世代の変わり目はございますが、須賀川高校の伝統、遺伝子を引き継ぎ、須賀川創英館高校におきましてもさらに進化していく学校となるよう学校の経営・運営に努めてまいります。校名は変わっても、地元須賀川、岩瀬地域の拠点校としての役割、そして立つ位置に変わりはありません。

「羽ばたけど 青春の歌 いつまでも」

本校教育のより一層の充実・発展のために、さらなる御指導・御支援をくださいますようお願い申し上げますとともに、卒業生の前途に幸多かれと祈念しまして、式辞といたします。

令和四年三月一日

福島県立須賀川高等学校長